

特 54

17

御座
新座
第八編
河竹點
透百景



戀闇鴉飼燎

七幕目

一 笹子雪中仕返の場 一同時狼小松殺の場
一 駒飼山越捕物の場 一 石和河原鴉遺の場
本舞臺一面の平舞臺上下雪山にて見切正面上手折廻し番
心の雪山下手谷間越山の書割此前より小高き山此際へ死骸
を入る事あり能所杉の大樹日覆より雪枝の杉の釣枝都
て甲州笹子峠中頃の体爰に獵人式人手細山達附草鞋はく
そ頭巾を冠り鉄炮を擔ぎ立掛り居る此見得日挽唄雪下し
よて幕明く(○)何は甲州が山國だ迎未九月の末だのよ斯
か雪が降れての思ふ様も働らけず又四五日も休まよや
成ね(△)夫は此頃狼が爰等邊へ時折出て旅人を喰て成
ぬから出合たらば一打は打殺さふと思つて居よ(○)向ふ
も命が惜いと見え己等達の影を見と山の中へ一目散り尻
尾を巻つて逃込が早く殺して仕舞度ものだ(△)其様も噂さ
が發と爲と自然と往來の人が無かり土地の衰微も成事だ
(○)夫故峠の甘酒屋が禮を爲から狼を打て呉ると私等へ
頼み(△)四五日跡は喰殺されたの随分可成女だッたが

彼の何所の者だッたか(○)駒飼邊の者ださふだが元が旅
の女郎をして人を欺して金を取た悪い奴だと言事だ(△)
どうで狼杯を喰れて非業を死と爲者のソリヤア様者
じやアねト雪下しよ成り雪降て来る(○)段々強く降
て来る是じやア今夜も積るだらふ(△)山から出て来た猪
を打て今日の立前を取たらば(○)早く歸つて濁酒で温ま
つて寐るとせう(△)己の餅が搗て有柄難煮を喰て温まら
ふ(○)イヤ餅と酒との右左(△)是から二人も左右も別
れ(○)モウ一廻り廻らふか(△)滅法寒く成て来たト右の
鳴物よて兩人左右へ別れて這入時の鐘詠への合方雪下よ
て日蔭より雪を降しバた／＼と向ふより前幕の小松類
冠り既しよて出て来り花道で一才跡を見返り舞臺へ來り
はッと思入有て(小)松遠よ嘶しよ聞ぬ故賢三さんの妹の
亭主と知ぬ文三さん取る丈金を取た上向嶋の渡し場で一
人情死させた柄私しを切ふと言の尤も與り隠れて居け
れとお崎さんの眞實心も強い氣も碎け臆病風も怕氣立
裏から此所迄逃て来たが思ひ掛あひ此雪で往來の無い丁
度幸ひ多と積らぬ其内よ裏手を廻つて内へ歸らふト向ふ

明治十九年六月廿二日

へ思入有て(○)向ふへ人が来る様子疵持足故小蔭へ隠れ
遺過して跡柄跡らふト右の合方よて小松思入有て杉の大
樹の蔭へ隠れる向ふより前幕の文三出て来り(文三)小松
の産れが石和と聞夫を目當り尋て來て思ひ掛さくお崎が
此大雪夫よ付ても今しがた遠目よ見掛し女姿何やら小松
よ似て居故顔を見様と思ふ内風よ冠つた笠を取れ跡へ戻
つて拾ふ間よ其女を見失つたが横道へでも曲つたか何よ
しる向ふへ往て一息繼て行と仕やうト舞臺へ來り四邊へ
思入有て(文)雪よ残つた足跡の正しく女の足跡だが此所
ぎり先へ見ぬの何處へ行た事成かハテ合點の行ぬ事だ
ナアト合方さッぱりと成上の方を尋る此内小松杉の上手
へ廻り大樹の影より顔を出逃様かといふ思入文三下手を
尋るト顔を見合(文)ヤ己れの小松か(小)文三さん(文)
能も己を欺したか(小)エト逃よ懸るを引戻し(文)目よ
懸つたら逃しやア仕ね(ぞト小松是迄と云思入よて(小)
逃るかと言ささりやア何で私が逃るものかねト文三を振
拂つてさう／＼しく裾を巻つてまやがむ(文)己れ斗り

彼様も不實者よと思ひかねだ能も／＼此文三を一皮冠
つて欺したな(小)ソリヤアお前が問拔だから(文)何だと
ト急度さる詠への合方よ成(小)女郎や藝者の客商賣否や
座敷も賣物も機嫌を取て勤めよや成ぬ惚たと見せて鼻毛
を算大した金を貰ふの口直しよする好夫を遊ばして置
金よ爲のサ腹を立ていけかいが行渡りの能顔をして奇
麗よ金の遣ひ被成が未／＼青い藝者買其様事じやア惚
られ無から惚てる内の内儀さんを可愛がるのが錢入す只
程安い物り無から内儀さんを大事よおし夫が一の分別だ
よ(文)ソリヤア己れが言ねへでも百も承知して居事だ其
女房よ難儀を爲せ親から貰つた地面家作諸道具迄も賣て
仕舞大した金を入上たも心から故今更よ愚痴を言よも及
ばねへが能も日外一所よ死ふと虚涙を顔した上いでと言
時己一人身を投させて跡へ残り死だ積りで影を隠し男の
所へ往たぞやら己も運能助けられ命拾すよ仕舞たが友
達中へ此文三が顔の出せね様よしたの皆ち小松己れゆ
ゑその悔しさよ女房子の難儀も餘所よ所々方々探し歩行
た甲斐有て爰で逢た天の助け殺して恨みを晴さよや置



かぬ(小)遅かれ疾かれ一生一度の死きよやア成らぬへ
 體未だ廿五の曉を越て間の無私だから少と死よやア早い
 けれどお望なれば殺されやうが惡垂者でも人豈人言すと
 知たお前へ解死人今度の一所死れるから夫を樂みふ文
 三さん欺した事り免してお呉(文)假令解死人で死罪も成
 共己れを吾が殺さるやア恨みの念が晴ねへぞ(小)元欺さ
 れたの間拔だから夫を思はず恨みお思ひ死でも私が殺し
 度お前も松助同様死神よでも誘はれてるのか(文)
 其生口をト懐ろから短刀を出し抜掛る小松止て(小)モウ
 私をお前切る氣か(文)オ、切ねば吾の腹が愈ぬ(小)い
 よく切るから○私逃るよト文三を突倒し小松逃出す
 (文)汝逃る逃すものかト文三立掛る小松雪を取て打付
 逃る文三雪を拂ひ追欠て引戻し一寸立廻つて急度見得是
 より詠への鳴物も成文三短刀で切て懸る小松の菅笠を取
 り是を止雪下し烈く舞臺一面雪降立廻り宜敷有て小
 松逃行を後から一刀切る(小)人殺したくト杉の大樹の
 廻りを逃廻る事一二度有て顔へ血紅を附し吹替逃出る壘
 掛て切倒るゝを乗掛り止刀を刺(文)能も己を欺しやアが

つたな○ト死骸を踏まじり悔しき思入有て○是で日頃の
 恨みも晴心も清潔したから一先古郷へ立歸り女房や子
 供の始末を附訴へ出て浮處刑受ん○ヤ向ふへ人が来る様
 子見答られぬ其内ト文三死骸を山の蔭へ入○閑道傳ひ
 裏手を越し、さうだト文三短刀を懐へ入れ笠を至上
 手へ急ぎ道入舞臺花道とも雪布を引取り知せし付ト口
 く成道具居所替り成上下の雪山只の山も替り釣枝
 杉の釣枝も替り正面の雪山を引取る遠見打返し成る
 本舞臺三間の間常足の二重岩の蹴込此上九尺常足の二
 重古びたる辻堂茅葺家根本椽附上手板羽目打破り下手椽
 格子左右板羽目も打破り成仕掛大樹の杉を其儘残し
 向ふ一面岩山杉の梢を見せし夜の遠見左右岩山もて見切
 日覆より杉の釣枝都て笹子峠古びたる辻堂の休ト口く
 みて道具納ると大陸摩懸り床の上りも成る「夫連山賊
 々として杉樹茂りて森々たり梢を落す木枯も岩も急る、
 谷川の水より外も音ぞなき笹子峠の辻堂も結びし夢も破
 れ格子扉開いて立出る小松の四邊見廻してト此内能程よ
 ドロくもて差金の蝶二羽辻堂の内へ這入是もて扉を開

き以前の(小)小松夢を見たる思入もて前へ出ホツと思入有て
 (小)夫から今の夢で有たかト本釣鐘を打込詠への合
 方成小松思入有て○先刻思はず文三さんの内儀さんよ
 お目も懸り聞も哀れお断し人を欺して金を取る悪い
 心の私でもまさか鬼の子でも無れば世の人情の知て居故
 人を恨まぬ心立し涙も暮て過去た悪い事が胸も浮み我
 身を悔んで居所へ文三さんが内へ来て見え掛り殺すと
 言咄しを聞て若奥へ踏込れて殺されたら賢三さんや七兵
 衛さん難儀を懸ねば成ぬ故裏からそつと脱出て此辻堂
 へ隠れて居る内花を曳た夕部の勞れで兼共無兼たに見
 え文三さん殺されたどつとしさい夢を見たので木の葉
 嵐の此寒さよびつしより肌へ汗をかいたが餘程私も神經
 が狂つて居と見えるわへ○何もしろ切斷まれ惣身へ金が
 と入たから儲口でも有たらふト空を見て○兼た故時が知
 無しが未だ六時よ成まいから掛しも早く歸ると仕様○
 「木の間の星をよすがとさし帯引めて辻堂を下るとたん
 ん生茂る藪を隔て、狼の鳴音も小松の胸りかした小松帯
 をト辻堂より下様とするとたんだの方よて狼の遠吠する

小松胸りきし跡へ足を引き今見た夢も獵人が
 時折此所へ狼が山から出ての人を喰と言た
 の若や正夢成が今一聲鳴たの犬と違ふ様
 子だが那が狼の遠吠かしらん何は氣丈私
 も惣毛立程氣味が悪く向を見て○向も二ツ並
 で光の若狼の眼で無か一人を人共思ひざ
 る氣丈の小松も狼もどつと身の毛も忽ち又齒
 の根も合ぬ胸震ひト小松氣味の悪き思入「一
 陣落す山風も連て笹原がさく」と連立出る狼
 又ト風の音もてちらく」と木の葉を散し下手
 山の蔭より縫ぐるみの狼三疋出て來り小松を
 取巻(小)ヤコリヤ狼が一胸りきして辻堂の内
 へ逃込戸を破れ椽へ上りて戸や羽目の破れ
 を嚙割音烈しく小松の詮方泣聲もてト文句の
 如く狼椽へ上り戸や羽目の破れを嚙割小松破
 れたる狐格子より顔を出し(小)誰を助けて下
 さいまし狼は喰れ升助けて下さい「一生
 懸命呼立る聲の初め懸け共答ふる人も嵐し吹



音も烈しく戸や羽目を嚙割く狼が中へ入よと見ければ
 わつと計り又嚙付れ扉を毀して逃出る小松ト文句も做ひ
 宜敷狼戸と羽目を嚙割音してト「はらく」と毀れし穴
 より狼二疋と入と内もて小松アツと下手の崩れ掛り
 し狐格子をばらくと毀し小松手足へ血紅を附送て出る
 狼も追欠出て一耳迄裂し口を明眼怒らし取巻れ詮方さ
 さよ手を突てト狼三疋小松を取巻小松是非なく下居て
 (小)コレどうぞ命を助けて下され内へ歸れば此禮も魚
 りと肉成と急度禮も持て來から命斗り助けて下されコ
 レ拜み升く「一兩手を合せ伏拜めと見向もあさず悪獸の
 見込し女通さじと牙を鳴して飛附たりト小松宜敷思入文
 句の切床二挺の合方霞めて山下も成て狼小松へ飛附狼
 も喰る立廻り有て小松辻堂へ逃込狼進行立廻つて
 上手の羽目をばらくと毀し二方吹抜成辻堂の正面の
 中段四枚開きの書割小松血紅も成ひよろ」として柱へ
 取付き急度見え狼又飛付小松どうぞ成り(小)ア、苦しい
 くト狼手を喰へて出て來る小松左りの手を隠しひよ
 ろくと立上り花道へ行ふとするを狼裾を喰へて引戻し

小松立廻つてどうと成一手負ひ苦しき息を繼(小松)斯る
 非業を死をすすも十四の年から家出奇し親も不孝をした
 罰と多くの人を救た報ひ自業自得仕方がねへ早く己を
 殺して呉一言聲さへも四苦八苦ト小松ひよろくと立上
 り辻堂の椽へどうとかけ狼一疋後ろから襟へ嚙付二疋
 の左右の足へ嚙付「哀れかなやト本釣鐘を打込仕掛
 て小松の襟より血紅流る、本釣鐘山おろし三重もて暮
 本舞臺中足の二重土手の蹴込上の方山の眼物もて見切下
 の方敷疊松の立樹日覆より同く釣枝向ふ石和へ續く枝川
 の流れを見たる田圃夜の体駒飼宿入口の体愛も前幕のか
 崎徳太郎を連立懸り居る下手も前幕の忠藏下居る此見
 得合方水の音もて幕明(忠藏)モシか家儀さん定めてお腹
 も立升うが何卒珍勘辨下さりませ(崎)小佛時で谷へ落
 だと思つたが夫でい其方助かつたか(忠)崖から谷へ落
 升た時左りの足を厳く打歩行事が出来升すひく致し
 て居升たを山稼の杓が見付どうして落たと聞れた時賊お
 出合て此谷へ落升たとやし升たら夫い如何も氣の毒だ
 私か内で行る迄療治をしると深切も言て呉升り地獄で

佛と連立参り袖が木から落た時附升と言打傷の薬を貰ひ
升て附ましたが甲斐も名高い徳本の傳法とやらで稀妙な
利僅か内も痛みも去元の様い成升ぬが歩行る様も成
たゆむ悪い心を改めて眞人間に成ます氣で身延山へ参詣
し出掛升てより升る(崎)そきたばかりの正直ものと思つ
て居たゆむ頼みと思ひ甲府へ供え連た所小佛時で私し
ま迫り既此身を汚さふと言ひふ様無事をしてまた倦
たらず其様を其方巧みをしやるのか(忠)其お疑がひの
ゆ尤でより升が親から貰つた大事の體を不具も成たも心
る柄濟さい事を致し升たと思ひ升ると勿体無どうぞお詫
を仕度物と思ふ所へ斗らずも爰で目も懸り升たの御祖
師様の引合せどうぞ御免被成て下さり升ト傍へ寄り辭儀
をする(徳太郎)母様忠誠が怖いわいのト崎又絶る(崎)
ナノ頭是さい徳太郎でさへ其方を此様も怕がるもの私
猶更怕ふて成ぬ(忠)今更お詫を致した迎お取上とより升
まいが嘘と眞實と長い目で御覽被成て下さり升○此坊ち
やんよ迄忠藏の怕いとされ升るのも皆お心の間違から今
改心をして見升と何してア、云氣も成たかと實も悔しふ

ムリますするト忠藏顔へ手拭を當て泣徳太郎是を見て(徳)
アレ忠藏が泣て居よ(崎)オ、泣て居とト誠かと言思入
忠藏眼を見て(忠)お前様何言事でお眼がお悪く成升た
(崎)重なる苦勞も兎や角と初手の逆上眼で有たが悪い風
が球へ染終見え無成たわいの(忠)徳ちやんをお連被成
無お困りてより升る是迄の譯もお供をさせて下さりま
せ(崎)イエ、夫より及べぬわいのト此時上手より前幕
の賢三郎頭巾を冠り七兵衛のトンビを着て草履まで出
來り此聲を聞(賢)其所居の姉のお崎か(崎)エ、私を
妹と仰しやる(賢)そちが兄の太之助だ(崎)エ、ト胸り
あし○兄さんでより舛たかエ、お懐しふより升る賢三
郎は絶付(賢)久しく音信せきんだの深い譯が有ての事
どうぞ堪忍して呉る(崎)コレ徳太郎是が平常言叔父様じ
やぞ(徳)夫から私の叔父さんかト取付く(賢)オ、い、
子だト天窓を撫○斯言可愛い子が有りながら藝者よ
現を抜すとの文三どのも心得ちがひだ(崎)夫又付て内
なく難難辛苦をした故も終も盲目と成りました(賢)そち
が苦勞をしたことも仔細有て委舖聞た久しく逢すも居た

故又話し度事聞度事山程有か此所の往來殊もつくり
されぬ身の上斯して居る間も心が急石和村の鶴道で甲
作と言者の内を尋ねて行くれ己も跡から直も行ど(崎)
オ、其甲作殿と言人よ小佛時で難儀と救われ厚いお世
話も成升たから私が御禮も其家を尋ねて参り升所(賢)知
る人あれバ丁度幸ひ少しも早く其所迄行けト忠藏前へ出
(忠)甲作殿へ私しも改心致した事を話し此身の詫を頼み
升から何卒其所迄私しをお供にお連下さりませ(賢)シテ
此人(崎)此間まで宅も居た忠藏といふ若者(忠)心得
違ひで内儀さんよ御難儀を掛升たが忽ち此身も罰が當り
御覽の如くの不具も成改心致し升た故御詫を致して居升
る(賢)然いふ事さら石和迄案内をして遣て呉ね(忠)へ
イ徳ちやんを背負して御案内を致し升う(崎)夫で内本間
も改心したか(忠)未だお疑ひ被成升るか(賢)直も己も跡
から行から氣遣はずと行がよい(崎)成事さら前と一
所(賢)少し爰も用が有から一足先へ行て呉(崎)夫で内
跡から来て下さりませ(賢)今も行から待て居やれ(忠)ト
レお供致し升うかト合方水の音も忠藏徳太郎を背負か

崎杖を突向へ遣入賢三郎跡を見送り(賢)思ひ掛さい文三
が来たので小松何所へ逃て行たか此方ハ笹子と思つた
が文三が石和へ行と聞初狩の方へ行たか知らぬ○是も付
ても小田原の相摸屋へ来た橋の熊藏己が盗を仕た事を知
てる故も酒匂川の河原で據處を殺した時助け呉と絶
られた娘の己が金を取た渥美の娘のお夏殿内へ歸して遣
たので足手纏ひが無さつて安心イヤ安心の出来無の先
列七が云通り探索方が近邊を歩行己を張る様子モウ一
遍小松を探し知すハ一先石和へ行ふト此以前上手ハ五
幕目の化地藏の三五郎脚半草履まで窺ひ居て(三五郎)オ
小松が色の賢三さん能己が邪魔をしたか(賢)其方何
所で見え顔だか邪魔を仕たとい何の事だ(三)元手を掛
て東京から金も仕様と連て来た渥美の娘を酒匂川から
前が連て来た故も夫を返して貰ひ度のだ(賢)オ、其一言
で思出した過日酒匂川で出會した勾引しの三五郎か(三)
勾引とい何の事だ面も似合ぬ言種だが色も成て東京から
引渡つて来た彼娘得心づくで相摸屋へ前借をして遣る所
誰が差がねか裏から逃しお前が酒匂川の河原から富士の

根方を連れて行たから又盗人又追銭で此甲州迄出掛て来て
 笹子下の安泊笹屋と聞て隠家へ尋ねて行たら誰も居ず近
 所で聞バ夫婦共盗の件で引れたと云のでこいつア時を越
 し儘よ逃たえ連へねへどお前の跡を追て来たのだ玉が無
 りやア償ひの金を出して誤まんさせへ(賢)源美の娘ハ七
 兵衛よ今日東京へ送らして立して遣た其途中尋ねる人よ
 出會し直も娘ハ渡したから用が有から東京迄出懸て往て
 文句を言へ(三)ソリヤアお前の差圖ハ受ねへ行ふと行め
 へと己の勝手な路用を遣つて笹子迄来たのハ仕事の邪魔
 をした償ひ金を貰ひよ来たのだ(賢)己よ向つて償ひを出
 せと云のハ如何云氣だか餘まり目先の見えねへ奴だ(三)
 大さき聲で威すのハ己より足下が目先が見えねへ假令娘
 を引摺ひ勾引しの科が有共何程か苦役をすれバ濟のだ兎
 器を持って手流を負せ小梅通りで五百圓金を盗んだ強盗よ
 酒匂河原で熊藏を酷く殺した人殺し此ニテ條で命のねへ
 大した科の有足下夫を知てる己だから何程か金を出して
 も宜らふ(賢)路用を遣つて来た事だから草鞋錢を呉ると
 言なら其方を素手で歸しやア仕ねへ否か威しを言れちや

ア拾銭も遺氣のねへ如何も其方の言通り兎器を持た強盗
 人殺しの有賢三郎ひだき口を利ねへで早く内へ歸るが
 い(三)五百圓濡手で取た餘りの金が有だらふ手取早よ
 百圓出したら夫で命を繼いで遣ふ(賢)天窓よ習つて滅法
 ぢ大さき事を請出したお強盗の上人殺し逆も命のねへ己
 だ黙止て歸りやア免して遣がぐづく言ア殺して仕舞ふ
 ぞ一人殺すも二人殺すも取れる首の儘一ツだ命が惜けり
 や早く歸れ(三)四邊も聞手が無といつて此ま素手じや
 ア歸られねへ度々人切れたから化地獄といふ仇名を取
 た山女街の三五郎體ハ地獄の石より堅へ切れる物なら切
 て見ねへ(賢)命を取るも殺生だが世間の爲よ成ねへ野郎
 ドレ一思ひよ殺して遣ふか(三)小癩な事をト賢三郎懐中
 から短刀を出し抜掛るを三五郎止一寸立廻つて屹度見得
 時の銜銃への鳴物よ成三五郎木ッ切を持宜しく立廻り有
 て目潰しよ砂を打付賢三郎かこつく三五郎ハ上手へ逃て
 遁入(賢)エ、口程も無野郎ださア○今彼奴の云を聞バ
 七兵衛夫婦が引れたと云が舊惡の有る體だから詮所歸る
 事ハ成めへ○小松の行術も氣掛りだが浮く仕ちやア居れ



ねへから石和へ往て逃ると仕様○ト此内風の音烈く上手
 の山の蔭より以前の狼一疋小松の切首を啣へ出て来る賢
 三郎是を見て(賢)ヤコリヤ狼が人を喰たか○ト狼首を下
 へ置て賢三郎を目懸飛掛る賢三郎短刀を抜狼を突是よ
 てぐるく廻つて倒れる手拭ひで短刀を拭ひ鞘へ納め懐
 中へ入れ(賢)何所の誰か知ねへが喰殺されたハ女と見る
 ○ト風の音よ成焚残りの火燃揚る○今一吹の風よつれ残
 つた焚火が燃上たハ丁度幸ひ此灯りで○ト首を覗き見て
 手よ取揚(賢)ヤコリヤ女房小松が首エ、○ト首を持
 た儘どうと成伏鱈の入り地獄和讃よあり呆れし思入よて
 (賢)扱ハ矢張畔へ逃此頃噂の狼ハ喰殺されて死たのか○
 是迄多くの人を欺し曲つた事をした故よ惡事の報ひで此
 様ぢ非業も最期を遂たのか心柄とハ言乍ら思へバ不便ぢ
 事だナア○ト首を見て愁ひの思入宜しく○何ハ兎もわれ
 此首の我手よ入たも盡せぬ縁是を小松が賢の兄石和の鶴
 遣甲作へ少しも早く届けて遣ふト賢三郎手拭で首を結へ
 行ふとする上手へ三五郎先よ目明し六人紐付尻端折禱鉢
 巻よて十手を持出て(捕手)強盜船木賢三郎(六人)浮用だ



折から身性が悪くそでね(事のみしたやつ故大方悪い事をして首を切れた事で有る何所で川へ打込だか己の所へ流れ着た血筋の兄の甲作は葬むつて呉と言のだらふ親兄弟は苦勞を掛けいやつだと思へとも只た二人の兄弟は己を慕つて来たかと思へバ憎い所か可哀さうで胸かいッばいお成て来た(乙)ソリヤ阿父尤もだ己でせへも悲しい物お前一人の妹だから嘆息しい事だらふ是を祖母様が見たからバ何様は歎かしれやアしねへト手拭で涙を拭ふ(甲)まさか隠して置れもせず夫が今から胸つかへだ(乙)何でこんなお伯母さんみじめお死やうしおさつたらふ(甲)是と言のも不孝の罰(乙)子ハ孝行よしといふ(甲)世間の人の見せしめ(乙)成何たる因果おことか(甲)思へバ不便おト甲作首を見て涙をふり拂ふ○鶺鴒の中で鶺鴒の騒ぐを乙松蓋を押へる双方宜敷木の頭○事だおアト愛ひの思入乙松蓋を取上る此模様よろしく合方竹笛水音烈しく拍子轟

八幕目
一石和村甲作内の場

本舞臺三間の間平舞臺正面上手一間押入戸棚上三尺佛壇を取込内は佛具宜敷此脇三尺畫圓杯を張し襖此下杉戸式枚引續て一間古障子出這入口下手一間中窓古障子を建此下鼠壁上の方一間折廻し古障子家臺定例の所丸太の門口竹簀戸下の方一間對下しの下家三尺口繩簾三尺下地窓鼠壁此前は船籠を纏めて結へ積重ね有中窓の前は圍爐裏自在竹籠子掛あり傍は鹿茶碗を入し籠杯あり都て石和村鶺鴒甲作内の体下手は角行燈を燈し此傍は甲作母はいさ白髪鬘結び髪世話婆の拵へ袖無半天を着て針仕事をし居る下手は鶺鴒の女房おわい、おわいし和形世話女房の拵へよて居る船唄へ水の音を冠せ幕明(おわい)今日朝から曇つた故今夜は降ふと思ひ升たが風が出たので持直し升た(おわい)甲作さんお松さん商賣は油断なく能精とお出被成升(おわい)最今月夜は成から今の内稼がよや成ぬと孫を連れて出掛升た(おわい)私共の内稼で降ふと云て休み升たが只休む斗りなら仕方無が酒を呑錢を取す遺ふ故鼎木は籠でふり升(いし)夫も二合か三合で仕舞升と宜けれと香出升と駒引で直一升は成升から

翌日拵だ位るで、其穴が埋りませぬ(いさ)私共の甲作の酒の一吸も呑ぬのよ休む事が嫌ひ故其苦勞の入りませぬ(わい)甲作さんの此村で評判の親孝行目の寄所へ玉が寄と其又孫の乙松さんが親より劣らぬ孝行者(いし)實は此方の老母位る世に仕合奇人の奇い是で死されたお信さんが健康で居あされば言分なした(いさ)實は前方の言通りお信が健康で居て呉れば夜廻仕事をするも及ばず實は毎日彼が事を思ひ出さぬ事の奇いの臺所元から瀝ぎ洗濯針仕事も人手に掛らず夜毎晩欠さず私の肩を揉んで呉恐らく世間又彼様を素直者有ると思ふ程の心立夫故片時忘れぬ(わい)其くせ平常の健康で有たが不斗した感胃が元と成思ひ掛さく死れたも昨今の様で有たが最三年でより升(いし)甲作さんも四十二の厄を越えて間が無から未だア男盛り故跡目を一人貰ふたら宜らふと思ひ升(いさ)夫も私しが勤めたけれど最乙松が十八も三三年の其内は嫁を貰へば其時又他人が居て何かか面倒年を取らぬ前を使つて心無やうかれと二三年の事成り辛抱をして居て呉と彼が言の尤も故所々からお世話をしてく

さるが皆お断りを言升る(わい)成程嫁子を貰ふた時違つた中の母親が有て口舌の起るもの(いし)コリヤ甲作さんの言る通り貰ひぬ方が能入り升(いさ)水入す故遠慮が亦く體は骨折折しても心安ふ入り升る(わい)是は付ても千代さんが内は居あすつたら宜らふ(いし)今何處も居あさい升か便りでも入り升たか(いさ)兄と違つて彼女めの十四の年から苦勞を掛女のくせは内を出て何處へ行て居る事やら頼と音信不通も生て居るか死だ事か少しも便りが入りませぬ(わい)お千代さんとい子供の折遊び友達で入り升たが其時分は病身で能苦勞を掛あさんしたが(いし)其大恩を返さず又々苦勞を掛るといふ不孝な事でも入り升(いさ)死だ親父も正直者私しも悪い心の持ぬが何いふ事であの様な不孝者が出来ましたか(わい)其替り甲作さんが二人前の孝行成るの天道様が其邊で差引勘定がして有升(いし)遂淨々と長勵しで夜延仕事邪魔を仕升た(わい)私しの用を忘れて居た〇ト風呂敷包みより小重箱を出し〇今日日婆さんの十七年で先刻團子を拵へたがツイ遅く成升たが乙松さんよ上て下

さ(いさ)夫は有難ふ入り升(わい)重箱の其儘は明日返して下さり升(いし)夫でい暇致ませうか(いさ)今茶でも煮升うから最をつと断して入りませ(わい)茶の馳走よ成度が内の酒も仕舞た時分(いし)早歸つて片附ませう(いさ)蘆久保の茶が貰つて有バ又明日の晩咄しよムれ(わい)何ぞ明晩の茶の子を持って茶の馳走よ成ませう(いさ)夫から二人の衆(わい)大さよ邪魔を(兩人)致し升たト右の鳴物よて兩人向ふへ道入と直よ向ふより前幕の忠藏古き小田原挑灯を提げ杖を突出て來り跡より内儀さま今の女中も聞升たら鶴退ひの甲作殿の向ふの家で入りませ(崎)ヤレく夫の嬉しい事じやモウ僅か

(いさ)甲作の手前で入り升が何方からお出なされました(忠)東京から参り升て入り升が在宿で入り升か(いさ)日が暮てから甲作の漁も出升て入り升る(忠)然仰しやるお前様の母親まで入り升か(いさ)へい左様で入り升る(崎)母親まで入り升から免あされて下さりませトお前へ出る(いさ)ついぞお見受すさぬ方何方様で入り升る(崎)私に東京の下谷茅町に居り升た穂積文三の妻崎と申升者不思議縁で先達て小佛峠で甲作様が難儀をお救ひ下さり升た浮禮も出升て入り升る(いさ)玉川から俸が歸つて委しい断しを致し升たが夫でい貴女が難儀儀あされたお崎様で入り升るか(崎)浮子息の甲作様も厚いお世話も成ました(いさ)見ればお眼の悪いのは山坂道を態々とお禮の及び升ぬもの(崎)い態々の上りませぬ元私し甲府の生れ八日町で敷屋を致す栗原太兵衛の娘も今度里へ参り升放浮禮も上つて入り升(いさ)八日町の敷屋様の浮娘も入り升たか然言事から先く是へお通り被成て下さりませ(崎)有難ふ入り升る(忠)お詞も随つて彼方へお通りさせませ(崎)左様されば免被成

ら住馴し住居も人又取れて仕舞は覽の通り袖乞同様見影も亦い此様も果敢き形も成外た(いさ)嫁も出被成升た穂積様の存し升ぬが八日町の住家へ能身身上でムリ升たが其は娘は此様も形も成成され升り元の起り小松とか言藝妓故でムリ升何者か存ませぬが憎い奴でムリ升(崎)夫も私不東故小松殿のみ悪いと言必ず譯でムリ升ぬ(いさ)イェ〜夫の前さま悪い事ムリ升ぬ男を化す古狐小松が悪ムリ升るト又結唄も有り向ふより前幕の文三以前の忠藏附出て来り(文)思ひ掛おく其方又逢ひ尋る甲作の家が知れた(忠)モウ一足で私しが安泊へ泊り升とお目掛られ升んだ(文)お崎も向ふの家居か(忠)ハイお泊りされてムリ升る(文)其鶴遣ひの甲作が己を欺した小松の兄夫故小松を尋ね来たのだ(忠)夫で内居た老母の小松の母でムリ升たか(文)素知ぬ振で尋ねるから小松の事を言まいぞ(忠)夫承知でムリ升る〇ト兩人思入有て舞臺へ来り(忠)〜イ又上り升た(いさ)何ぞ用でもムつてか(忠)イェ〜左様でムリ升ぬ手前主人ム斗らずも此先で出合升た故是へ伴ひ參

り升た(いさ)スリヤ文三様が(崎)エ夫の誠の事かいのト立上り爪突て轉ぶ(いさ)ア、モシおあふムリ升トおいさおさきを抱起す此内文三の草鞋を脱ぎ(文)眞平は免下さり升ト合方なり文三内へ這入(いさ)サア〜是へお通りおされ升ト文三能所へ住ふ(いさ)夫で貴君がお崎様のお連合でムリ升か(文)いかよも穂積文三でムリ升る(崎)オ、思ひ掛き文三殿能健康で居て下さりました(徳)親父さん逢度かつたトお崎搜り寄徳太郎絶り附(文)内の様子へ来る道〜忠藏から荒増聞たが和女一人又難儀を掛實言譯の仕様が(崎)連添女房其様を言譯杯へ入升ぬ只お變りのムリ升ぬが何より嬉しムリ升る(徳)己らも嬉しい〜わいの(いさ)無お二人共お嬉しからムト兩人嬉しき思入文三おいさ向ひ(文)お前様の甲作殿の老母でムリ升か(いさ)お初はお目掛り升が私し甲作が母いさと升る者でムリ升(文)お崎が厚いお世話もあり誠私し身取有難ムリ升るト手を突辭儀をする(いさ)其様仰しやつて却つて痛入升る(崎)深いお思ふ成升たから能仰しやつて下さりませト文三お

崎を見て(文)お崎和女の眼が見えぬか(崎)お前さんが内を出てから艱難辛苦致せし故初手の逆上で煩ひ升たも段々重りて兩方共見ぬ様も成升た(文)夫の難かし難儀で有ふ調度幸ひ東京を己が立折眼を煩ひ上榎町の桐淵様へ御願ひ申て薬を貸ひ一ト附で癒つた故又煩つた其時よと紙入へ入て持て居たト紙入の中より小サも煉を出し〇是を和女と遣ふから直其眼へ附るがよいトお崎の手へ渡す(崎)夫何より有難ムリ升(文)目迄悪く成程夫を思ふ貞節お和女又艱難辛苦させ實逢の面も目さく何から詫を仕やうやら(崎)私も何からやさうかお目懸つた嬉しさ胸支へて出升ぬ(いさ)ソリヤ己迎も同じ事氣を落附て寛くり嘸さう(忠)夫付て私しも旦那様へは詫をば致し升ぬ成升ぬ先其方のお嘸しが済升たらは其跡でお聞被成て下さり升(いさ)定めて積るお嘸しが澤山ムリ升うから至つて汚ふムリ升が内嫁が居た時分私しが居升た放れ家がムリ升から其處でお嘸し被成ませ(文)夫何より遠慮も有難ムリ升が(崎)甲作様のお留守中(いさ)イヤ其は斟酌より及び升ぬ程さく悴

も歸り升うから寛りと嘸し被成まし(忠)は深切も仰しやり升れば老母様の仰せも隨ひ(文)夫で暫く放れ家を(崎)お借す升でムリ升(いさ)何ぞ然被成て下さりませ(忠)左様おられ私し明朝早く上り升(文)忠藏其方よも是迄の内の様子を聞度れば(崎)共々與へ来たが宜(忠)其お許しがムリ升ればお供致すでムリ升(いさ)田舎の隣が半町あれば何處へ憚る所もさし(文)遠慮無れば是迄の(崎)積る互ひの身の上嘸し(忠)與へ參て寛くりと(いさ)トレ沙案内致し升ラト時の鐘合方よていさ先文三お崎徳太郎忠藏附て正面隙子の口へ這入時の鐘打上げ床の淨瑠璃も成る一冬近く時雨を誘ふ雨催ひ雲足早く立歸る甲作親子の道邊の傍へは暫しイみてト向ふより前幕の甲作持胸當へ首を包み是を抱へ出て来る跡より前幕の乙松鶴籠を擔ぎ出て来り兩人花道へ留り(甲)コレ母さんお嘸たら必らず欺き違ひ無から首の事己が言迄手前の黙て何も言(乙)己ア決て言ねへが首何所へ置(甲)る(甲)物置へでも入て置(乙)鼠が喰から止仕無(甲)夫じヤア手前番をして居て呉(乙)己ア氣味が悪て一人じ

やア出来無(甲)エ、いくじのねへ奴だち「露も漏し草の家の門へ二人の立歸り、二人舞臺へ來門口よて(甲)何を首を入れて置入物の有まいか(乙)親父此ビシの如何たらふト下手より有ビシを出す(甲)是の調度宜さうだ、首を隠して蓋をちしトビシの中へ首を隠し蓋をして(甲)斯して置バ大丈夫だト下手へ置奥へ向ひ〇母さん、今歸り升たよ(乙)アイ、一母の奥より立出てト奥より以前のいさ出て(いさ)オ、甲作歸つたか大々今夜のとやかつたな(甲)先刻なら、降升たから早仕舞ふして歸り升た(乙)籠の納屋へ入て置ふか(甲)オ、餌を遺送入て置て呉(乙)アイ、ト合方よて乙松籠を擔ぎ下家の内へ這入甲作足をつかふさいさ戸棚より布子と帯を出し(いさ)晝夜露で漏つたらふとやく着物を着たがよい(甲)最九月も僅か故露が深く下升から今が一番濡り升ト言作ら三尺帯を解筒袖を脱布子を着替〇コリヤ洗濯をした布子よ四角帯帯を出被成た(いさ)今夜の内よお客が有柄(甲)往來でさい石和村客が有と珍らしいト甲作帯を、下居る乙松も下家より出内へ這入(乙)ナ、お客が内よ有升か(いさ)

オ、其方も着物と着替たがよい(乙)アイ、(甲)シテ其客と言の(いさ)其方が此間小佛峠でお助けやた敷屋の娘はお崎様がお出被成た(甲)エ、お崎様がおいで被成た(いさ)まだ夫斗りであくお連合の文三様もおいで被成た(甲)夫の思ひ掛かい事でムリ升か(いさ)まだ、夫も思藏と言心得違ひをした者が子供をして來升たわいの(甲)シ、其衆の何し升た(いさ)其方、遂て行度と言れる故よ三人共内へ留て置升た(甲)夫の能溜て上て下すつたト此内乙松布子を着て漁り着た半天を片附て(乙)三人お客が内よ有て、追焚をせず成さいか(いさ)イヤ時雨空で寒いから幸や蘿蔔を刻み込で雑炊を焚て進せ升(乙)成程夫が温かて宜(甲)お溜つた三人よ私もお目も掛り度か何處よお出さされ升(いさ)色、お崎か有様子故裏の放へお連つた(甲)夫で、私も裏へ参り、挨拶をして來ませう(いさ)マアお飯でも喰てから寛ぐり仕たが能らふ(甲)イエ一寸お目も掛つて來升(いさ)言つ、悴へ目交してとつかり奥へ入よけるト甲作乙松へ思入有て這入おいさ圓子を入し重箱を出し(いさ)先刻仲間の卯之作殿から志ざし

の佛が有て拵へたとて圓子を貰ふた幸ひ内よ黄粉が有バお飯の前よ喰て何だ(乙)圓子の平常好だけれと今夜の喰度ムリ升ん(いさ)夜食を喰たの明るい内何ぞ途中で喰たのか(乙)イエ、何も喰升ぬが胸が支へて喰ませぬ(いさ)夫で、明日喰たがよいト乙松圓子を見て(乙)黄粉も附ぬ白圓子は、調度幸ひだ(いさ)ナ、其圓子が幸ひト(乙)サア幸ひだと言たの、親父が圓子を喰度と先刻途中で言升た(いさ)夫で、悴よ喰させ升(いさ)心ならぬバとこ、一問を立出る甲作が、奥より甲作出て來り(甲)後よお崎し致升と、挨拶のみして來升た(いさ)どうで泊つてお在成、寛ぐりお断し仕たが宜、思入有て(いさ)其方、圓子が喰度と言たさうだが調度幸ひ卯之作殿から貰ふた圓子黄粉も有バ喰たが宜(甲)イエ、圓子が喰度杯と其様事、言升ぬ(いさ)今乙松が然言た(甲)何をあれが言升たか(乙)親父が圓子を喰度と言た、是を供へ度トビシへ思入(甲)ア、コレ餘計な口を利なと言(いさ)夫で、圓子が喰度無か(甲)胸が支へて喰升ぬ(いさ)二人が二人胸が支へて喰られぬとい如何した事か、不審立れば

二人の拾ひし首を明し兼差俯向て躊躇バト甲作乙松と顔見合せ首の事を言兼る思入(いさ)見れば何だか二人共物思ひけな顔をして心持でも悪いのか(甲)イエ、私何ともムリ升ぬ(乙)己も悪く、ムリ升ぬ(甲)然言母さんお前社顔附が悪ムリ升が持病でも起り升たか(いさ)別、持病も起らぬが心氣の勞れか二三日以來兎角夢見が悪いので氣分が常の様でない健康な様でも年の上煩の、様よ仕度ものだ(甲)何を煩の、様よして下さり升女房でも有バ宜が男斗りでもムリ升から心よ幾等思つてもお前のお世話が行届き升ぬ(乙)己が女で有たら、何様よもお世話をしして手助を爲けれと男だから役立ね(甲)斯言時よ妹のお千代が内よ居升たらお世話が十分出來升(いさ)断、事寄甲作が母の心を占問バト甲作思入よて言(いさ)イヤ、那樣な不孝者の内よ居ぬ方が宜(乙)其様な事を言しやつても居たら悪く、ムリ升まい(いさ)内よ居バ氣を揉せ親も苦勞を掛るヨリ實、顔を見度もない(甲)夫で、お前お千代が事を何共思ひなさらぬか(いさ)彼、我子で無と思へバ私、何とも思ひぬわいの(乙)其様な事を祖母さん言

ても今伯母さんが死だと言たら(甲)嘸お歎き被成で有ふ
 (乙)何で私が歎くものか彼が死な事を聞たら黄泉の障
 りが無て能(甲)夫でいお歎き被成せぬか(乙)オ、悦
 ぶ共歎かぬわいの「歎かぬと言母親の詞を聞て甲作が○
 (甲)其思召ならお断らずが千代の非業な死を仕ました
 (乙)エ、ト恠りして○死だとい夫や何處で(甲)何所で
 死だか知升ぬが今石和川で流て来たお千代が首を拾ひ升
 た(乙)エ、ト恠りなし「エ、と斗り打驚き餘りの
 事又泪も出す(乙)エ、ト其首の何處に在(甲)只今目
 又掛升る○「びくの中より取出し蓋の上へ首を乗ト下手
 のビツの中から首を出し蓋の上へ乗て(甲)不孝な者でも
 血を分た只一人のお前の娘能顔を見て遣て下され○「
 泪乍ら差出せば母の取上顔を見て「おいさ切首を取上
 見て(乙)オ、お千代だ「何でア情ない此様な姿
 成たのだエ、見るも悲しい事だなア○「首を抱へて性体
 なく涙も暮て打歎けバトおいさ首を抱へ歎き思入宜しく
 (甲)不孝者故歎かぬと今仰しやツたじやムり升ぬか餘り
 未練でムり升るトおいさ首を下へ置(乙)オ、不孝者故

歎かぬせぬ是で黄泉の障が無嬉し泪が翻れるわいの(乙)
 祖母さん泣のハ尤だ己でせへも悲しくて泪の止度が無も
 のを遣慮せずと泣ッしやい「いふ涙を押拭ひ(乙)斯
 な非業な最期を仕やるも子供の時から品行が悪く十四の
 年家出して夫限便りもせぬ程な親不孝をした天罰世
 間の娘の能手本是で死でも氣障りなく心安く成たわいの
 (甲)何處から流れて参つたか不氣味な女の首なれば突出
 升たが又元の我足元へ流れ着放れ升ねバ不思議故取上
 升たが乙松が親父の首が似て居ると言れて能く見て恠り別
 れ程程たお千代が首扱の今夜流れ着たハ兄を慕つて妹が
 葬ひつて貰ひ度故と見え升(乙)夫程兄を慕ふなら何故
 健康で居る内又詭手紙でも送越ぬのだ己れが健康で居る
 内の親兄弟を何とも思はず首も成て便つて來るとい死で
 も心の曲つた奴其様な形も成管だ(甲)久しく人の噂も
 妹が事を聞升なんだが斯して見升と親兄弟も逢ふと思ッ
 て甲州路へ参つた者と思われ升如何なる事だ此様な首を
 切られ升た事か親の不孝な奴なれと只一人の妹も
 私の不便でムり升「流石親身の兄弟も首取上て甲作が身

の果敢なきをさめ「と託ち歎けバ俱く「○ト甲作首
 を取上愛ひの思入宜しく乙松も泣乍ら首を取て(乙)幼稚
 時又別れたから縁々顔の覺え升ぬが斯も親父に似て居
 ものか○「是が東京で死れたら此伯母様も違れぬもの首
 でも斯して逢れるのハ誠嬉しムり升只一言乙松か
 と○(乙)伯母さん言て呉ないか○「首を抱へて乙松が歎
 くも眞の泣寄も堪えず咽入り○ト乙松首を抱き宜し
 く愛ひの思入(乙)オ、尤もだ「己の不孝な娘故憎ふ
 て「成ぬ故死でも悲歎思ひぬが是程親が疎む様な女も
 稀な惡たれでも伯母と思つて乙松が一音物を言て呉と歎
 く俊しい心根が嬉し故又泪が翻れる決てお千代で泣
 せぬ此乙松で泣わいの○「孫も准へて泣母の心の内の
 ぢらしく共々甲作乙松も暫し泪も暮たりしが○トおいさ
 首へ思入有て泣甲作乙松も愛ひの思入有て(甲)斯言姿
 成たからい是迄か前不孝をした科の何卒水もして免し
 て遣て下さり升(乙)言ふ様な人でもなし故何様其方が
 詭る共子と思ひねバ免されぬ(甲)是が生て居る事なら一
 ツの功を立させてお詭を致す事も有明日葬れバ土とな

り再び伊恩の返されぬ果敢なき首の此妹私が一生の頼み
 故詭を聞て下さり升(乙)不良者を兄弟として不便と思ッ
 て詭るのを聞ぬハ嘸や強情な者と其方ハ思ふで有ふが最
 早余命もない體程が日死で冥途へ行とも彼とハ詞を交さ
 ぬ心じや(甲)夫でいお前の罪も成ます後生を願ふハ老の
 役是も功德の一ツ故お免し被成て下さり升(乙)假令何様
 乙松さんが孝行が仕度ても首も成て仕方がない今日
 から己らが伯母さんの替りも孝行仕升から免して上て下
 さり升ト手を突頼むおいさ思入有て(乙)夫程迄も人
 無を二人して詭を言のを聴ぬハ老てハ子も随ふと言壁
 乙松バ二人も免し不孝を免して遣ませう(甲)夫ならお
 免し下さり升かト首も向ひ○コレ妹其方が不孝を二人し
 てお詭すて免成し成し(乙)嘸伯母さん嬉しからぬハ一
 生たる人言如く首も向ひて親と子が言も泪の村時雨母
 も乾かぬ袖絞り○ト三人宜しく愛ひの思入有て(乙)二
 人の詭は是迄の不孝の罪を免して遣るぞ男ならハ是非無
 れと女の身も此様な不良事を致すとハ言ふ様な人
 なし存生中の言も及ばず死で迄も此様な親又恥を與へる

と何たる不孝な事なるぞ(甲)斯る非業な死を遂るも皆
 な其身の爲た科斯言娘や妹を持是も前世の約束事今更言
 ても返らぬ事だ(乙)早く伯母さんへ線香でも手向て上度
 りり升(甲)オ、手前の机を持って来い(乙)アイ、
 と返事も尻軽に取出す机水向の茶碗も其身の厭焼も香爐
 へ立る線香の烟りと消る果敢なき見も哀れな白團子〇
 ト此内乙松下家より手習机を持来り佛壇の前へ置此上へ
 首を乗佛壇の香爐へ線香を立厭焼茶碗へ水を手向以前の
 團子を備へ(甲)是も附ても合點の行ぬ此お千代が首の
 切口刀で切たと思われぬが遺恨を受ける事でも有て弄殺し
 まされたのか(い)何處で如何いふ目も逢たか(甲)委し
 い断しを聞度ものだ一言折門より最前より親ひ居たる旅人
 が〇ト此以前能程下手より前幕の賢三郎出て来り門口
 裏向に親ひ居て(賢)其傍疑念の晴る様委しくお断し仕
 つらん〇「頭巾脱捨静く」と入来る賢三を見るよりもト
 賢三郎頭巾を取内へ這入を見て(甲)思ひ掛ないか前様の
 (い)何れのお方で(甲、い)りり升(賢)年間立し事
 故も見忘れられたでりり升か(い)悪奴の言乍らみじ

太兵衛の悴でる(甲)スリヤ栗原様のは子息でりり升た
 か(い)然仰しやればお幼稚時親御様と傍一所お断を取
 りお出なされた太之助様でりり升か(賢)如何も其太之
 助でる壯年の頃武藝を好み士族に成ん志願して武藝を
 修行なせじ故悲き友も交りて遊里へ通ひ放蕩なし遂に實
 家を立出て長し諸縣を遊歴なし此程當地へ参つてる
 (甲)其栗原の傍子息が妹お千代を存存じなる(乙)何言
 譯でりり升る(い)仔細をお聞せ下りり升〇「言ふ此方
 の座を進み〇ト賢三郎前へ出礎の入りし詭への合方も成
 (賢)お断すも面目無が五年跡又八王子の鶴屋といへる料
 理茶屋にお千代が奉公爲し折我も同所へ寄留なし時折酒
 を呑み参り酌をさせしが縁と成て遂に深く言替し夫婦約
 束なせし後二人連立東京を見物乍ら参りてより爰は二月
 彼所より三月と爲事もなく遊びし故所持せし金を遣ひ失し
 詮方なき相談づくしてお千代の下谷數寄屋間の新常磐
 屋の世話になり小松と名を替藝妓の勤め我の少しの目的
 わりて奥州地方へ旅持ぎ其折互ひの素性をバ明さぬも
 我妹のお崎が亭主と文三を知らねば色をもつて深く欺
 し多くの金を取りし上情死爲んと偽つて文三のみ身を

投させ其身の死したる体を見せ影を隠して小田原まで娼
 妓とあつて我知己へ文通せしゆ尋ね行き又もや其處を
 逃去つて笹子下の笹屋といふ安泊りし居し今日計
 らず文三が來たり小松を殺して遺恨を晴すと聞いて裏よ
 り逃出せし行末を尋ね出し途中此首喰へて狼が飛掛
 らんとしたるを只一刀で刺貫き能く見れば小松が首扱
 の狼も喰れしかと暫し悲歎又暮たりしが縁有當家へ贈ら
 んと携へ行んとせし所へ我も遺恨の有者が打て掛るを拂
 ひ退争ふ内又後なる川へ首を打込しが流れく石和
 みて甲作殿の手に入て親御の許へ來りし誠と思議な
 奇縁でる〇「一部始終を物語れば甲作の打驚き賢
 三郎宜しく思入りて言此内甲作おいと顔見合せ驚く思
 入有て(甲)扱の文三様やお崎様も傍難儀掛し小松と言藝
 妓の妹でりり升たか(い)知ぬ事迎今の今迄餘所の娘と
 思ひしが(乙)現在親身の伯母さん(甲)思ひ掛けない
 (三人)事じやなア〇「母も悴も諸共暫し呆る、斗りな
 り〇ト甲作おいと乙松宜しく思入(甲)此切口が只ならぬ
 と思ひ升たがお断しで此頃世間で噂の有笹子峠の狼も
 喰殺されたのでりり升るか(い)悪奴の言乍らみじ

めな死をバ致し升たな(乙)其狼が知るなら己らが殺して
 遺度ものだ(賢)夫の手前が其場まで只一刀で刺殺せしぞ
 (乙)破を取て下りり升たかエ、有難ふりり升る(甲)お千
 代が小松と言事の賢も存知升なだが貴方も栗原太之助
 様と今でもお名を仰しやりますか(賢)仔細有て變名なし
 今の船木賢三郎とす(甲)夫で船木賢三郎様と(い)〇
 お名をお替ささり升たか〇「一間は始終立聞せし文三お
 崎忠藏も其其場へ立出てト奥より以前の文三お崎忠藏
 出て來り(文)是迄知らず居つたるが小松が色の賢三郎の
 (崎)兄さんお前でりり升か(賢)二人は名乗も面目さいが
 船木賢三郎の我なるぞ(文)知らぬ事とて是まで愚の敵
 と思つたが(忠)思ひ掛お崎様が尋ねる賢のお兄様
 (賢)夫ゆる最前安泊へお崎が湯をバ貰ひ來た時奥は隠
 れて名乗合す文三殿がムツた時も只餘所事言あしたの
 其名を明し難き故(崎)夫で最前薬の湯を貰ひし時良
 夫の事を委しく知たお内儀(賢)われが小松のちれの果
 だ(崎)エ道理で詞の端くが心得難く思ひし小松との
 でりり升したか(文)我も斯とい存せぬゆゑ小松も恨みを
 返さうと此家へ尋ね來りしお崎忠藏兩人が断し聞バ



大恩ある甲作どの、妹まで今で打れぬ義理(忠)夫も非業を最期まで見るも果敢あひ此首級(甲)文三様も妹が嘸や憎ふふりませうが貴君がお手を下さすとも天罰うけて狼又喰殺されし自業自得只一思ひも切れますとの事替つて此首を喰切れ升苦しみ何様でふり升う憎しと思ふ恨みをバお晴あされて下さりませ○「泪乍ら甲作が妹の罪を詫けれバト甲作宜しく詫る(文)兄弟の詞を聞すと此身更く恨みのあいた思入有て(いさ)女子の幼い時よりして慎むべきの戀の道斯る最期を透たるも男狂ひをせし故ぞ(乙)此伯母さんも眞當に亭主を持た事さらバ斯死様の被成まい(いさ)親も不孝お奴での有(賢)お千代が斯言死を爲しも元の起りの言替せし此太之助が爲し業親兄弟への言譯の○「言つ、短刀取出し抜よと見えしが脇腹へぐつと討り突立れバト賢三郎懐より短刀を出し肌を脱ぎ脇腹へ突立る皆々、何りして(甲)ヤ、是や何故又此生害(崎)何でお前の死しやんす(文)早まつた事皆々被成しよア○「人々絶り止むれば手負の苦しき息をつき○ト皆々思入竹笛入の合方又成(賢)今迄包み隠せしが我の凶器を携へて強盗あして

是迄も多くの金圓盗みし上酒匂川原駒飼まで悪徒とい言乍ら熊藏三五郎兩人を切害せし大罪人所詮一命あき身の上お千代を所々へ連歩行人を欺き金圓を掠り取し我故かれバ親兄弟への言譯を命を捨る此太之助是で罪を免して下され○「免して呉と血を染し手を合してぞ伏拜めバト賢三郎手を合せ拜む(甲)私等親子へ言譯から今死す共宜事を(賢)身の悪逆を後悔し一命捨る兼ての覺期よしや爰で死すとも死刑お成べき我身體必らず妹も歎くまいぞ(崎)悪い人でも親身の兄是が泣す居られ升うかトお崎探り寄て泣(賢)臨終の際はお頼みり世又便さき此妹行末長く文三殿何卒見捨す下さり升(文)見捨る心の無れども身代限をせし上再び歸る家になし(忠)附てい何を被成も先立もの資本の金いふお甲作打領さ○(甲)人の噂は妹が娼妓お成しと聞し故主人は借し前借を返して内へ呼歸さバ無老母が悦ばんと長年溜し其金が丁度此頃百圓又纏まり升てムり升妹が此世又居升ねバ多くの金を遣はせし文三様への言譯は是を貴君へ差上り升から僅かれ共資本よあされ家業をお始め下さり升せ○「戸棚の内より取出す札の包みを差出せバト甲作戸棚より封じたる札包みを出し文三の前へ出す(文)志しの忝さいが折角溜し其金を私か方へ借受てり(甲)其遠慮より及び

升ぬお遣ひ被成て下され(いさ)娘が爲に能追替(忠)左程迄は仰しやれバ一先夫を借さされ家業をお始め被成た後再びお返し被成ませ(文)夫での詞又隨ひて此百圓を借するト札包みを取頂(甲)借る杯と仰しやらずお遣ひ被成て下さり升ト本釣鐘を打込賢三郎顔をわけ首級を見(賢)我故お千代が非業を最期今冥途へ赴くから三途の川を待て居(崎)責て臨終の此名残よ○ト薄き風の音お崎眼を明き四邊を見て(崎)ヤ、思ひ掛なく此眼が明兄さん顔が見升る(賢)何して其眼が癒つたぞ(文)夫を先刻の薬の功驗(崎)エ、有難ふふり升るトバトくよて奥より徳太郎欠出(徳)慈母さん一所お寐てお呉(忠)徳ちやんお目が覺升たかト又本釣鐘鳴る(甲)秋の夜長も鶏の(いさ)聲も明行朝ぼらけ(乙)東へ登る日の影も(崎)憂ひを拂ふ山風や(賢)西へ隠る、月影(文)消る間早さ東雲お(忠)悲しみ有バ悦びの(甲)吉事を告るト木のかしら(皆々)明鳥ト賢三郎引廻す甲作首を取賢三郎み見せる皆々引張宜しく本釣鐘鳴るカケリよて和子慕(畢)

明治十九年四月二十八日御届 (定價金十二錢)
 編輯人 六月十二日出版
 東京府平民 吉村 新七
 淺草區馬道町二丁目十二番地
 東京府平民 森 直三郎
 京橋區木挽町二丁目十三番地
 出版人

